

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）

様々な依存症の実態把握と回復プログラム策定・推進のための研究  
（研究代表者 宮岡 等）

平成 25 年度分担研究報告書  
病的ギャンブリングと債務問題等との関連および  
病的ギャンブラーの家族らの実態調査と回復支援のための研究

研究代表者 宮岡 等 北里大学医学部精神科学主任教授

研究要旨

．（病的ギャンブリングにおける家族の関わりの研究）

病的ギャンブリングは、ギャンブリングの問題を持つ本人だけでなく、周囲の家族らへも深刻な影響を与えられている。今回われわれは、病的ギャンブリングの進行や治療と家族がどのように関係しているか、そしてそうした家族をどのように援助するかを明らかにすることを目的に、研究 1 . 従来文献の検討、研究 2 . 病的ギャンブラー当事者と家族の語りの質的分析からみた家族への支援の 2 つの研究を行った。従来文献の検討により、病的ギャンブリングは配偶者や子どもや家族の関係性に大きなダメージを与えていることが示された。病的ギャンブラー当事者と家族の語りの質的分析により、病的ギャンブラーがギャンブリングを開始してから治療や相互援助(自助)グループに繋がるまでには 7 つの段階があり、家族にとってこうした問題の認識がより早めに行えることで、ダメージが大きくなる前に適切な対応ができる可能性があることが示された。今後、病的ギャンブリングが生じてくる段階に応じて、家族が適切な対応が取れるような援助を行えるようなサポートの手法を開発していくことが重要であると考えられた。平成 26 年度は質的研究の引き続きの評価と量的研究を実施する予定である。

．（債務問題支援機関における病的ギャンブリング問題に関する研究）

ギャンブリングにより引き起こされる問題のひとつに借金のトラブルがある。われわれは、関東圏内の債務問題への支援を行っている関連機関、司法書士会に協力を依頼し、多重債務に関する相談者の中でのギャンブリング問題の頻度について、日本語短縮版 SOGS を用いた調査を開始した。平成 26 年度も調査を継続し、債務問題とギャンブリング問題の関連性について評価を行う。

．（病的ギャンブリングの早期介入手法の研究）

病的ギャンブリングの問題は、治療や回復支援に結びつくまでの初期介入が困難なケースもあると考えられる。今回われわれは、「ギャンブリングの問題を持つ本人が、ギャンブリングを止めなければならない」という決意に至っていない段階においても、介入が可能な手法のひとつについて提示した。この手法を用いることで、ギャンブリングの問題を持つ本人が、過度な抵抗感を持たずに、支援機関との関わりを継続することができるものと考えられた。

研究協力者

田辺 等 北海道立精神保健福祉センター  
石川 達 東北会病院  
森田展彰 筑波大学 医学医療系  
新井清美 首都大学東京 健康福祉学部  
松本俊彦 独立行政法人 国立精神・神経医療  
研究センター 精神保健研究所  
後藤 恵 成増厚生病院  
伊波真理雄 雷門メンタルクリニック

樋口 進 独立行政法人国立病院機構 久里  
浜医療センター  
河本泰信 独立行政法人国立病院機構 久里  
浜医療センター  
神村栄一 新潟大学 教育学部  
岡崎直人 さいたま市こころの健康センター  
稲村 厚 稲村厚事務所  
田中克俊 北里大学大学院 医療系研究科  
蒲生裕司 こころのホスピタル町田

|      |             |       |
|------|-------------|-------|
| 村井俊哉 | 京都大学大学院     | 医学研究科 |
| 吉田精次 | 藍里病院        |       |
| 森山成彬 | 通谷メンタルクリニック |       |
| 赤木健利 | 桜が丘病院       |       |
| 内田恒久 | 大悟病院        |       |
| 西村直之 | あらかきクリニック   |       |

．(病的ギャンブリングにおける家族の関わり  
の研究)

研究協力者

森田展彰 筑波大学 医学医療系

新井清美 首都大学東京 健康福祉学部

概要

病的ギャンブリングの進行や治療と家族がどのように関係しているか、そしてそうした家族をどのように援助するかを明らかにすることを目的に、研究1 ．従来文献の検討、研究2 ．病的ギャンブラー当事者と家族の語りの質的分析からみた家族への支援の2つの研究を行った。

従来の文献の検討により、病的ギャンブリングは配偶者や子どもや家族の関係性に大きなダメージを与えていること、および不適切な養育環境のダメージを受けた子どもが病的ギャンブラーになることが示された。つまり、家族関係の問題と、病的ギャンブリングの発生には相互に影響があり、これにさらにうつ状態やパーソナリティ障害等の併存障害や貧困や暴力などの問題が絡み合っており、病的ギャンブリングの支援においては家族への対応が重要であることが示された。こうした援助ニーズに対して、家族に対する心理教育などが始められているが、欧米も含めこうした家族支援やその研究は未だ少ないことが指摘されている。

病的ギャンブラー当事者と家族の語りの質的分析により、病的ギャンブラーがギャンブリングを開始してから治療や相互援助(自助)グループに繋がるまでには7つの段階があり、そ

の中で家族との関連を示す段階は(1)お金をやりくりしながらギャンブリングを楽しむ段階、(2)ギャンブリングに魅了され、仕事とする段階(3)ギャンブリングの動機づけが強化される段階、(4)コントロールできると考える段階、(5)治療、回復支援が可能という認識がなく、借金・尻拭いを繰り返す段階、(6)追い込まれ、治療や施設に結びつく段階という段階あることがわかった。対象者は幼少期より親和性ギャンブリングあり、高校卒業後より急激にギャンブリングとの関係が密接になっていった。また、金銭面では、比較的容易に消費者金融からの借り入れをはじめている。一方、家族との関係を見ると、病的ギャンブラーは借金や、その原因となっているギャンブリングについては家族に隠すという特徴があることから、第5段階に至ってはじめて家族はギャンブリングによる借金があることを明確に認識し、第6段階にいたってそれが治療や回復支援が可能であることを理解していた。このことから、家族にとってこうした問題の認識がより早めに行えることで、ダメージが大きくなる前に適切な対応ができる可能性があるといえる。

今後、病的ギャンブリングが生じてくる段階に応じて、家族が適切な対応が取れるような援助を行えるようなサポートの手法を開発していくことが重要である。

#### A. 研究目的

病的ギャンブリングとは、衝動制御障害であり、のめり込み、コントロールの喪失、耐性、そしてギャンブリングに関連した自制と再発のサイクルによって特徴づけられる(American Psychiatric Association、2000)。また、ギャンブリングとは、結末がはっきりと分からない活動や出来事のために、価値のあるもの(普通はお金)を失う危険にさらすことであると言われている(Gambling studies program、2010)。

病的ギャンブリングはアディクションであると考えられており、過程・行動アディクショ

ンに分類される。アディクションとは、自分にとって不利益・不都合と認識しているが、その物質や過程・行動、あるいは関係に強迫的に囚われて自らをコントロールできない、認識と行動の解離を意味しており、物質アディクション、過程・行動アディクション、関係アディクションの3つに分類されている(西川、2012)。アディクションに関する調査報告は多数なされており、病的ギャンブリングに関しては、これまで研究が蓄積されてきたアルコール問題との関連性や類似性に着目した、アルコールによる脳内の報酬と類似した脳内の報酬機序に関する研究が散見されるようになった。これらの研究では、病的ギャンブリングでもアルコールと同様、刺激興奮を求める素質とオペラントの条件付けにみられる学習行動を示すと報告している(森山、2009)。つまり、刺激欲求の強い個人が、抑うつ的で困難な状況下にあるとき、たまたまギャンブリング行動が加わると、恍惚感や高揚感といった内的報酬が生じて、オペラントの条件付けが発動するのである。オペラントの条件付けにみられるこれらの行動は、習慣から依存へのプロセスを強化し、問題を深刻化させていく。ここで、どこまでが健康な状態で、どこからが病気であるかということが議論となるところであるが、習慣から依存へのプロセスは連続的で、境界が曖昧であることから健康や疾病にはっきりとした線を引くことは困難であるのが現状である。このことから、アディクションの概念においても正常から障害への「連続性」が強調されるようになっている(洲脇、2005)。

この、正常から障害への「連続性」の中で、障害に至る前の早期の段階ならば比較的短期間の治療介入でより高い治療効果をもたらす一方(樋口ら、2000)、問題や障害が深刻化するに伴い治療による効果や、その持続が図りにくい状態となってしまうとされる。しかし、患者本人は自己の問題や生じている障害に気付かない、もしくは気付いたとしても医療機関を

受診する、あるいは相互援助(自助)グループに参加するといった対処行動をとるには至らないことが多い。更に、家族については障害が進行した状態で初めてその問題に気付くこととなるのが現状である。新井ら(2013)が、アルコール依存症者とその家族に対して行ったインタビュー調査では、それぞれがプレアルコールリックを認識する変化のプロセスには時間的差異があり、この時間的差異が生じることで患者の飲酒問題がより深刻化するという負の連鎖がもたらされていることを示した。このような状況は、物質アディクションであるアルコール問題に限らず、過程・行動アディクションや関係アディクションでも生じるものと考えられ、この状況が治療を困難にする、もしくは問題を深刻化している危険性があると推察される。

そこで、本研究では、病的ギャンブリングの進行や治療と家族がどのように関係しているか、そしてそうした家族をどのように援助するかを明らかにすることを目的とする。

## B. 研究方法

研究は、研究1:病的ギャンブリングの家族の状況と支援に関する文献研究、研究2:病的ギャンブリングの本人と家族に対する質的研究という2つの研究から成る。

研究1:病的ギャンブリングの家族の状況と支援に関する文献研究

### 1. 対象および調査方法

病的ギャンブリングの家族に関する従来の研究論文を収集し、これをデータとして主に以下の課題についてまとめた。

病的ギャンブリングが家族にどのような影響をあたえているか

家族関係が病的ギャンブリングの発生にどのような影響をあたえているか

病的ギャンブラーに対する支援の研究

## 研究2：病的ギャンブラー当事者と家族の語りの質的分析からみた家族への支援

### 1. 対象および調査方法

対象者は、都内の回復支援施設担当者より紹介を受け、現在はギャンリングを使用していない回復者とその家族6組である。この6組に対して30～80分程度の半構造化面接及び、質問紙調査を行った。

### 2. 調査項目

インタビュー項目は、文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)「プレアルコホリックの身体的・精神的・社会的変化」(平成22年度～平成23年度)により実施した、アルコール依存症者とその家族からのインタビューで用いた項目を参考にした。尚、この研究により、アルコールに起因する問題が生じてからアルコール使用障害の診断を受けるまでの患者と家族の認識は、飲酒の効用を求める、直視し難い現実から逃れる、健康上の障害が出現する、

飲酒への自制が利かなくなっていく、依存への行動が強化される、お酒が麻薬のようになるの、6つの段階があることが示されている。また、質問紙の調査項目には樋口らが開発したギャンリング尺度及び、及び、平成20年度障害者保健福祉推進事業 依存症者の社会生活に対する支援のための包括的な地域生活支援事業「アルコール・薬物問題をもつ人の家族の実態とニーズに関する研究」を参考にした。

#### 1) インタビュー

(1) 回復者：ギャンリング開始年齢、ギャンリングを始めたきっかけ等を含む16項目

(2) 家族：1日のうち回復者と過ごす時間、家族が認識している回復者のギャンリングの状況を含む16項目

#### 2) 質問紙

##### (1) 回復者

属性(年齢、性別、最終学歴、同居家族、職業、就業形態、既往)、医療機関や自助グループの情報源

##### ギャンリング尺度

##### (2) 家族

属性(年齢、性別、回復者との関係、同居家族、職業)、回復者の既往、医療機関や相互援助(自助)グループの情報源  
ギャンリング尺度

##### 3. 倫理面への配慮

本研究は、筑波大学の医の倫理委員会の承認を得た上で実施された。

##### 1) 研究対象者に対する人権擁護上の配慮

研究対象者に対して、書面にて 研究の趣旨や方法、 データは研究目的のみに用いられ、個人情報 は外部に漏らされないこと、 協力は自由意思であり、協力を断っても不利益を被らないことを説明した上で、研究協力の同意を得た。

インタビューは、前述の内容を説明後、研究の同意が得られた回復者と家族に対して個室で別々に行い、インタビューの内容が第三者に漏れることのないよう実施した。その際、対象者の同意を得てインタビュー内容をICレコーダーに録音し、その後、逐語録を作成した。

質問紙は無記名式とし、回答は全て電子データ化され、統計的に処理した。匿名性を確保するために属性は全て数値化した。USBメモリはインタビューデータと同様に、筑波大学研究室内の、研究者のみが施錠・解錠可能なファイルマスター内に保管した。また、データを分析する際には、ネットワークにつながっているコンピューターを用いるが、セキュリティソフトをインストールしてファイルが外部に流出しないようにした。

##### 2) 研究方法による研究対象者に対する不利益・危険性への配慮

インタビュー及び、質問紙への回答中に、調査協力者が不快になったり拒否的な感情を抱いたりする場合には、随時協力を撤回できることを説明書に明記し、口頭でも説明を行った。また、調査に対する質問や意見、万が一何らかの不都合が生じた場合にすぐに連絡できるよ

う、研究者の連絡先を記した説明書を配布し、調査終了後も研究対象者の手元に残るようにした。

#### 4. 分析

インタビューの分析は、次の手順に沿って行った。データを何度も読み返し、意味のまとまりごとにオープンコードとした。次に、研究対象者全員のオープンコードから、語られた言葉の意味を考えコードを作成し、意味の類似したものをまとめて最終コードとした。コードの類似と相違を比較しながら似たような特徴をもつグループに分類してカテゴリーにまとめた。

質問紙は、対象者の属性、ギャンブリング尺度について単純集計を行った。

### C. 研究結果

#### 研究1：病的ギャンブリングの家族の状況と支援に関する文献研究

文献検討を行い、主に以下のような所見がしめされていることがわかった。

##### 1. 病的ギャンブリングが家族にどのような影響をあたえているか

『病的ギャンブリングは家族に大きなダメージを与えている』

###### 1) 配偶者に対する影響

病的ギャンブリングは、それに罹患している人の家族や友人などの近い人に対して社会的、感情的、経済的に大きなダメージを与えることが報告されている (Hodgins, Shead, & Makarchuk, 2006; Petry, 2005)。一人の病的ギャンブラーがいると、その周りの8-10人の人に直接的な否定的影響を与えるという (Lobsinger & Beckett, 1996)。

家族の中でも、最も多く取り上げられているのが配偶者への影響である。病的ギャンブリングは、配偶者の経済状態、人間関係、身体的健康、精神的健康に大きな影響を与えている。病的ギャンブリングが配偶者に与える経済的影響は、人生を変えるほどのインパクトを持つ

ものであるとされる。

この問題を通じてギャンブラーは、カードや銀行における負債、胴元への負債、家族や友人への負債を持つようになる。配偶者は負債の事実を知らされるという経験を通じて、ギャンブラー当事者に関して経済的な意味での安全感や信頼感を失ってしまう。ただし、当初こうした借金は配偶者に知らされていない場合が多く、それが知らされた時には強い衝撃を受けるため、PTSDなどのトラウマ症状に結びつくこともあるという。負債した事実がわかってから、急に家族は財産管理者の役を担わされることとなり、借金返済のために借主や銀行、法律家との対応を行うこととなる。これらの対応は、家族にストレスを与える。時には、家族は自分の貯金を切り崩したり、再び働かないといけない状況になったり、地域に住めなくなるようなことも起きる。こうした影響は、当事者がギャンブリングをやめたとしても、何年にもわたって続く場合も少なくない。

また、病的ギャンブリングが婚姻関係のストレス (Hodgins, et al., 2007) や別居・離婚 (National Gambling Impact Study, 1999) やDVのリスク (Korman, et al., 2008) になることがある。

###### 2) 子どもに対する影響

子どもの生活は、病的ギャンブリングに強い影響を受けている。心身に強い影響を与えている場合もおおく、これが病的ギャンブリングの世代間連鎖につながっている場合もある。

###### 3) その他(家族以外の他者、自身の心身)への影響

対人関係上の影響としては、ギャンブラーに対する尊敬を失い、距離をとるようになること、怒りや憤怒、罪責感や自己批判、自分の役割や責任を果たせなくなるなどがある。長くそうした問題を秘密にされてきたも、そうした影響を強める。さらにギャンブラーのみならずその他の人間関係の人間関係に対する信頼感も失い、引きこもる場合もある。

身体的な健康への影響としては、慢性的な頭痛、呼吸困難、背部痛、胃疾患が報告されている。精神健康の問題としては、うつや不安や怒りの感情、孤立、自殺行動などが指摘されている。ギャンブリングや借金による罪責感、怒り、うつ、不安などから、友人や家族や地域から引きこもることもある。

## 2. 家族関係が病的ギャンブリングの発生にどのような影響をあたえているか

『病的ギャンブリングが家族や親族に集積性があり、またこれに合併する障害を持つ場合が多い』

病的ギャンブリングが、家族や親族において集積する傾向があることが指摘されている。また、同時に物質使用障害や気分障害、反社会性人格障害が家族に生じる確率が高いことも指摘され、共通性のある遺伝的背景がこうした集積性を生んでいる可能性が論じられている。

Donald W. Black, D.W., Patrick O. Monahan, P.O., Temkit, M.H., Shaw, M.: A family study of pathological gambling, *Psychiatry Research* 141 (2006) 295- 303

『児童虐待の被害は、病的ギャンブリングを生じる原因となっている』

Taber, McCormick, and Ramirez (1987) は、44 人の男性の病的ギャンブラーにおいて 23% の者が性的または身体的なトラウマを持っていたことを報告している。Specker, Carlson, Edmonson, Johnson, and Marcotte (1996) は、40 人の病的ギャンブラー（そのうち 25 人が男性）を調べて 32.5% が性的または身体的虐待を経験していた。Ciarrocchi and Richardson (1989) は、ギャンブラーにおいて女性の 82%、男性の 24% が児童虐待経験があったとしている。Petry, N.M. and Steinberg, K.L. (2005) は、治療を受けている病的ギャンブリングのある人 149 名を調査し、児童期の虐待体験が強いほど病的ギャンブリングの問題が重度であり、ま

た発症年齢が早期であることを確かめている。児童期虐待の被害のレベルは女性の患者の方が男性より高く、女性の病的ギャンブラーではとくに虐待体験との関係が強いと指摘されている。Lesieur & Blume (1991) は、ギャンブリングが、トラウマや虐待体験を対処する方法として用いられているとしている。

## 3. 病的ギャンブラーに対する支援の研究

『病的ギャンブラーの家族は、援助を必要としており、家族への支援をも目的とした心理教育などが始められている』

病的ギャンブラーの家族は、援助を求めてギャンブリング援助の電話相談を頻回に用いているとされている (Potenza et al., 2001)。一方、こうした援助ニーズへは十分に応えられていないことも指摘されている。

家族へは、心理教育を通じた介入が試みられている。特に、他のアディクションの家族で効果が証明されている CRAFT の手法を用いたものが注目されている。

Makarchuk, Hodgins, and Peden (2002) は、CRAFT 手法を病的ギャンブラーの家族の自助的な形式にした資料にすることを目指した。彼らは、家族のフォーカスグループを行い、病的ギャンブラーの家族の持つ特異的な問題やニーズを明らかにしようとした。

結果的に生じた否定的な影響や問題、無効な方法と有効な方法、対処メカニズム、物質使用障害と病的ギャンブリングの取り扱いの違い、どんな種類の援助が役立つかを話し合った。これに基づき以下のような内容のワークブックが作成されている。

- ・ 導入
- ・ 病的なギャンブリングの理解
- ・ 援助の動機づけを行い、維持すること
- ・ ギャンブリングの問題への意識を高めること
- ・ あなたが果たす役割を理解し、変えること
- ・ コミュニケーショントレーニング

- ・家族のストレスを減らす
- ・ギャンブラーを治療につなぐ
- ・家計のコントロール
- ・その他の問題への対処

ワークブックについては有効性の検証が行われている。すなわち、研究募集に応募してきた病的ギャンブラーの家族に対して、ワークブックを行う群と対照となる一般的な援助を行う群の2群に無作為に割り付けて施行し、3か月後に評価を行った。ギャンリングが減少したと評価した者の割合、プログラムに満足したとした者の割合、ニーズが満たされたとした者の割合では、2つの群で有意に異なっていた。一方、家族の個人的そして社会的機能、ギャンリングに関連した否定的な結果については両群間に差がなかったという。

## 研究2：病的ギャンブラー当事者と家族の語りの質的分析からみた家族への支援

### 1. 対象者の属性

本研究の全対象者の組み合わせは回復者とその妻であった。回復者の平均年齢は40.17歳(±6.21)、家族の平均年齢は41.0歳(±6.03)であり、本人の最終学歴は大学卒業が5名、専門学校卒業が1名であった。対象者のうち回復者は全員が就業しており会社員(経営を含む)3名、教員3名であり、家族は援助職・介護職2名、パート2名、教員1名、主婦が1名であった。

SOGS (South Oaks Gambling Screen、5点以上が病的ギャンブラーを示す)を見ると、回復者が自身が採点した平均得点は15.67点(±2.94)、家族が回復者のギャンリングを振り返り採点した平均得点は16.17点(±1.94)であった。

また、初めてギャンリングをした平均年齢は15.33点(±6.15)、回復者が経験したギャンリングはパチンコが5名であり、パチスロ4名、賭け麻雀3名の順であり、1日に賭けた最

高金額は10万円以下、100万円以下が3名ずつであった。

### 2. インタビューの分析

データ収集と分析の進行を通じて、ギャンリングすることで得る、お金をやりくりしながらギャンリングを楽しむ、ギャンリングに魅了され、仕事とする、ギャンリングの動機づけが強化される、コントロールできる、病気という認識がなく、借金・尻拭いを繰り返す、追い込まれ、治療や施設に結びつくの、7つのカテゴリーが抽出された。また、回復者6人の特徴的な背景と、ギャンリングを始めるに至ったきっかけが明らかになった。以下に、回復者の背景とギャンリングを始めるに至ったきっかけ、及び7つのカテゴリーについて、語りを引用しながら説明する。尚、カテゴリーを、コードを【 】引用した語りはイタリック体で示す。

1)回復者の背景とギャンブルを始めるに至ったきっかけ

回復者の背景には、【寂しさを感じる】【周囲の大人がギャンリングをする】という特徴があり、【身近にある類似体験】【勝負事が好き】【周囲の人もギャンリングをする】【無いものを満たす】というきっかけからギャンリングを始めていた。

ギャンリングをする大人が周囲にいる等、幼少期よりギャンリングが身近にあったことで自然とギャンリングに対する抵抗が低くなる。そのため、よりギャンリングへの興味・関心を高めている。そのため、好奇心旺盛かつ、反抗的、衝動傾向の強い青年期にギャンリングへと引き寄せられていった。

パチンコとか間違いなくそうですね。兄貴がやってたところを、年離れてるんですよ。(中略)だからなんかすごい大人に見えたし、格好いいなって憧れてた部分もあったんですけど、なんか大人っぽくなって。パチンコやってたり

とか、そういう大人の遊びしてるのを、ああ、すごいなって変に憧れを持って見てたから早く大人になりたいな、みたいなのはあったのかもしれないですね(c)

## 2)7つのカテゴリー

7つのカテゴリーの中から、家族との関連が語られた お金をやりくりしながらギャンブルを楽しむ、ギャンブルに魅了され、仕事とする、ギャンブルの動機づけが強化される、コントロールできる、治療、回復支援の対象であるという認識がなく、借金・尻拭いを繰り返す、追い込まれ、治療や施設に結びつく の、6つのカテゴリーについて説明する。

### (1) お金をやりくりしながらギャンブルを楽しむ

このカテゴリーからは、【勝負のスリルを味わう】、【ギャンブルを優先する】、【ギャンブルのための資金を捻出する】の、3つのコードがあった。このうち、家族との関連が語られたコードは【ギャンブルを優先する】、【ギャンブルのための資金を捻出する】の、2つであった。

#### 【ギャンブルを優先する】

学校の授業や交際相手との約束よりもギャンブルの優先順位が高く、ギャンブルをする時間を重視する。この事実を両親に伝えることはなく、両親は授業を休む等してギャンブルをしている事実を知らなかった。これは交際相手においても同様であり、対象者はギャンブルを優先しているという事実を知られないような努力をしていたことが語られた。

(高校生の時に朝からパチンコしていたことを親は)いや知らないですよ、多分、学校に普通に行ってると思ったんですよ。専門学校も親は、多分、普通に行ってると思ってますね(b)

普通の人は言うかもしれないですけど、私は当たり障りのない嘘について、怒らなかったですね。(中略)それは多分、自分の中では、小さいころから良く見せたいとか嫌われたくないというのは、常にあったと思うんですけど(a)

#### 【ギャンブルのための資金を捻出する】

初めは小遣いの範囲でギャンブルを楽しもうとするが、「あればお金を使い果たす」ために小遣いだけでは賄いきれなくなり、不足する資金を補うためにバイトをしたり、友人から借りたり、異なる用途を告げて親からお金の援助を受けるなどしてやりくりしようとする。このような金策をしつつ、友人等、身近な存在の人々が学生ローン(消費者金融)からお金の借入れをしている場合は自らもその方法を用いるようになる。これを「隠し口座」と考え、「自分のお金」という感覚で用いるようになる。ローンをするようになるものの、学生ローンは限度額が低いことから多額の借金をするには至らない。

だいたい私は、春休み、夏休み、冬休みっていう間は、自分の父親の経営している会社でアルバイトをやって、そのバイト代なんかも、結局は全部マージャンで消えてたっていう感じですね(d)

18歳から20歳までですね。学生ローンに出会っちゃった。それが消費者金融関係との出会い。そんな感じです。なんか自分の隠し口座みたいな感じで使ってたって(b)

### (2) ギャンブルに魅了され、仕事とする

このカテゴリーは、【ギャンブル場を目の当たりにし、引き込まれる】、【ギャンブル中心の生活】、【ギャンブル場の裏側に関心を寄せる】の、3つのコードがあった。このうち、家族との関連が語られた【ギャンブル

グ中心の生活】を説明する。

### 【ギャンブリング中心の生活】

関心のあるギャンブリングを攻略するために昼夜を問わずギャンブリングの攻略法を研究し、ギャンブリングをする生活になる。そのため、自宅に帰る機会が減少していき、このことについて家族が苦言を呈すようになる。

結局もう生活が、夕方から夜中まで仕事して、それから遊んでってやって、もういつも朝帰りですよ。そうするとやっぱり、実家だったから、具合悪いじゃないですか。今何時、何やってんだ、みたいな。(中略) そんなんでもう家飛び出しちゃって。黙って消えてるので、家からするとなんか失踪したみたい、いなくなった、みたいな。そんなんでそのうち突き止めて、店に迎えに来るじゃないですけど、そんなことも何回かありましたけどもね(c)

### (3) ギャンブリングの動機づけが強化される

このカテゴリーは、【隠したい事実ができる】、【役割を担うことで変わる】の、2つのコードがあった。この2つのコードは何れも家族と関連する語りがあった。

#### 【隠したい事実ができる】

脅しを受けて借金を背負うこととなり、「借金を返済するため」という理由ができる。あるいは、借金を返済するためのお金を得るためにはギャンブリングをする時間を確保することが必要であり、時間を確保するために家族や職場に嘘をつくことになる。しかし、この借金の事実を家族や職場に打ち明けることができない。嘘に嘘を重ねることですじつまが合わなくなっていく、「人と話すことも面倒」に感じてきたことが語られた。

白状しちゃえば楽だとは思ったんですけど、そこで何が起こるかわかんない。どうということ

を言われるかわかんないし、離婚だと言われてもしょうがないと思うんだけど、それは嫌だったんでしょね。あと、やっぱり悔しいっていうのがあったかな(f)

いろんな理由付けができるようになってきちゃったりして、もう本当に訳がわからないですよ。(中略) だから、やっぱり一人になりたいようになってくるんですね。嘘つくのが面倒くさいし、つじつまが合わなくなってきたのも気付いてるから、人と関わるのが面倒くさくなってきて(f)

### 【役割を担うことで変わる】

役職につき、業績という結果を求められるようになる。評価を上げて収入を得ることは家族のためという思いから仕事に費やす時間が多くなるが、家族は帰宅時間が遅いことに不満を持つ。そのため、帰宅すると家族からは帰りが遅いことを問われる。このことが、家庭を居心地の悪い場所とさせ、ギャンブリング場に居場所を求めるようになる。

教室長をやってたんですけど、(中略)どんなに朝から晩までポスティングをしたりとか、ホームページを更新したりとか、その上授業もしたりとか、経理もいろいろ全部やって、その教室任されて1日ほんとに18時間とか働いたりとか、どんなにやっても成績が上がらないし、(中略)家でも一生懸命やってのに文句言われたりとか、もう心のやり場がないっていうか(e)

店長になれば、会社の中では「店長、店長」と言われて居心地がいい。でも家庭にいれば、文句ばかり言われる。(中略) 家族との距離とか、すれ違いとかっていうのは、どんどん、どんどん。で、分かってくれないとか。(中略) 正当化してやってましたね(a)

### (4) コントロールできる

このカテゴリーは、【ギャンブリングをする

時間もない】、【借金しないことが条件】の、2つのコードがあった。この中から、家族との関連が語られた【借金しないことが条件】を説明する。

#### 【借金しないことが条件】

現在の妻と交際するために、借金をしないことを含む条件が課された。交際したい気持ちが強く、また、借金の原因になっているのはギャンブルであるため、ギャンブルを中断することができた期間があることが語られた。

そのときは、ギャンブルをしてました、まだ。付き合いにあたって、妻からそんな状態じゃ付き合い合えないんでギャンブルやめると、友達、やっぱりギャンブルしてるやつが多かったんで、友達ともやっぱり頻繁にお金の貸し借りとかもしてたので、そういう借金、細かい貸し借りもやめると、あとは今やったら大変なことになっちゃうんですけど、車、飲酒運転するなど。その三つを約束っていうか、ちゃんとできないと付き合い気にはなれないっていうふうに言われて。そのときは、全部やめました(e)

(5) 治療、回復支援の対象であるという認識がなく、借金・尻拭いを繰り返す

このカテゴリーは、【ギャンブルに寛容な環境】、【ギャンブルへの欲求が勝る】、【借金が追い詰める】、【長くは隠せない】、【家族が返済し、借金から解放される】、【家族も対策を取る】、【治療、回復支援の対象とは思わない】、【黙ってお金を持ち出す】、【足をすくわれる】の、9コードが抽出された。このうち、家族と関連する【ギャンブルへの欲求が勝る】、【借金が追い詰める】、【長くは隠せない】、【家族が返済し、借金から解放される】、【家族も対策を取る】、【治療、回復支援の対象とは思わない】、【黙ってお金を持ち出す】について説明する。

【ギャンブルへの欲求が勝る】

社会人になり消費者金融からの借入金の限度額が拡大する。また、家族を持つようになる。家族との時間を第一優先するという理想はあるものの、ギャンブルへの欲求が勝り、ギャンブルをする時間を優先している。

マージャンなしでは生きていけないような感じですか。本当は仕事とか家族とか、そういうのが第一優先にならなきゃいけないのに、マージャンすることが、優先順位が上がっちゃってるという。これはどう考えてもおかしいんですけども、もうそれから抜けられないんですね(d)

#### 【借金が追い詰める】

消費者金融への利子を返済することに追われる。利子を返済するためにはお金を得ることが必要であり、お金を得るためにはギャンブルをするしかないという思考になる。そのため、ギャンブルができない時間はソワソワ、イライラする。手元にお金があるときには増やそうとしてギャンブルをし、負けている時にはお金を取り戻そうとしてギャンブルにのめり込む。利子を返済しなければギャンブルするための資金を得ることができない。更にお金を得ようとするものの熱くなるほど負けが込み、借金が膨れ上がっていく。このように借金が重圧となり、追い込まれ、感覚が麻痺していく。このような状況の中、借金が家族にバレることを恐れ、焦りを感じるということが語られた。

一番変わったのは、借金をするじゃないですか。そうすると、会社にもバレたくない。家にもバレたくない。(中略) 返済の日って近づくじゃないですか。返済の日が近づくたびに、また借りたりとかして、増やして返そうっていうふうにだんだんなってくるんですよ(a)

【長くは隠せない】

借金のために精神的に追い込まれ、「まともな思考ができなくなる」。そのため、これまで借金を隠すための工夫をし、隠し通してきたものの、借金を隠すための行動の緻密性にほころびが生じる。

なんかもうどうにもならなくなってくると、なぜかばれるんですよね。そういうカードが妻に見つかったりするんですよ。これ何？ このカードは、みたいな。不思議ですよね。助けてくれ、みたいなのが入ってるのかわからないですけど（c）

妻が言うにはおかしかかったって言ってますね。様子がおかしいし、それまでも普通に仕事で遅くなるってことがあったと思うんですけど、それとは何か違う感じを受けてたんじゃないですかね（e）

#### 【家族が返済し、借金から解放される】

借金が発覚する。家族も両親も借金を抱えた対象者を放っておくことはできず、これまでコツコツと蓄えた貯蓄を借金返済に充てる。借金をするのは小遣いが少ないからと考える家族もあり、これまで以上に小遣いの額が増える者もいる。対象者自身はこれまで自分を追い詰めていた借金がなくなることで、重圧から解放される。これに負けを認めたくないという気持ちも相まって更にギャンブルへとのめり込んでいく。

私がなんとかしなきゃみたいな感じになるんですよね。奥さんのそれが病気だとか言われて、共依存っていうやつですね（b）

取りあえず肩代わりしてもらおうと、もうすごい楽になっちゃうんですよね。ああ、良かったって（c）

#### 【家族も対策を取る】

借金が発覚したことで、家族は次の借金を防ぐためにカードを持たせないようにする、携帯

を所持させて居場所を確認できるようにするなどの対策をとる。

カード自体を持たされないようになっちゃったのかな（a）

私は携帯電話持ちたくなかったんです、所在がつかまれるから。やっぱ持たされましたよね。よくわざと忘れまして、携帯電話を（e）

#### 【治療、回復支援の対象とは思わない】

借金を繰り返すものの、本人も家族も「ギャンブル依存症（病的ギャンブル）」という問題であるとは考えず、「借金をすることが問題」であるとする。そのため、借金を何とかしようとして法律相談に行くなどの行動をとる。

やめたかったです。やめたかったですね。借金のほうですね（f）

病気とは思わなくて、生き方がおかしいと（d）

そのときは、まだギャンブル依存症っていう病気のことは思ってないです。だからその借金どうにかしなきゃいけないっていうようなほうで、動き回ってましたね（d）

#### 【黙ってお金を持ち出す】

家族が対策を取ることで、そして債務整理をする等して借金ができなくなることで、所持金がなくなっていく。それでもギャンブルを継続するために家のお金を黙って持ち出す、あるいは職場のお金を着服・横領するようになる。

しかももっと増えてて500万なので、もう返せなかったんで、女房の財布から銀行のカードをそっと抜いておろして下ろして、それを当てようと思ったんですよ（a）

ようは今までの消費者金融の変わりに、今度、会社の金庫が、その役目を果たすようになって。さすがに150万とはいえ、50万そこから取っち

やうと、もうヤバいわけですよ。なんか50万、どうなってるのみたいな話になるので。だからそこから先は、50万とか60万ごとに、ヤベえ、会社の経費を使い込んだって、今の奥さんに白状して(b)

(6) 追い込まれ、治療や施設に結びつく

このカテゴリーは、【嘘を重ねる】、【家族からの援助がなくなる】、【自ら事実を告げる】、【病んで働けない】、【救いを求める】の、5つのコードがあった。この中から、【嘘を重ねる】、【家族からの援助がなくなる】、【自ら事実を告げる】の、3つについて説明する。

#### 【嘘を重ねる】

借金が発覚し、家族と「ギャンブルをしない」ことを約束する。しかし、家族にはギャンブルをしていないと伝えるものの、実際にはギャンブルを継続している。

ある程度、生活のリズムを取り戻して、ある程度大丈夫だったんですけど、そんなの嘘で、ずっと続いて(a)

#### 【家族からの援助がなくなる】

繰り返される借金と嘘を家族は「おかしい」と感じ、「借金」「嘘」といたキーワードを用いてインターネット等でおかしさの原因となっているものを調べる。そこで「ギャンブル依存症(病的ギャンブル)」という問題と相互援助(自助)グループの存在を知り、主に相互援助(自助)グループに身を置くことで問題に対応する方法についての知識を得て借金への対応策を取るようになる。

立て替えるのは一番駄目だから、そういうケツをふかないで欲しいっていうか、しちゃ駄目っていうことを言われていて(a)

もう貸さないって言われて、嫁さんにもいったけど、もう自分でなんとかするしかないよって言われて、債務整理をそこでしたんですよ

(b)

#### 【自ら事実を告げる】

ギャンブルを続けることで借金が膨らみ、自分ではどうすることもできなくなる。「もう駄目だ」と追い込まれ、自ら借金がどうにもならない状況になっているという事実を家族に伝える。

でも今思うと、借金返済のためなんだよな。それで、たぶん熱くなってたんだと思うんですけど。2回目も自殺未遂をして、帰ってきたときは「本当に申し訳ない」と。「自分がやりたくてやったんだと思います」って、そのときは言いました(f)

とにかく、もうどうにも支払えなくなったときに、やっとある朝、かみさんに言ったんですね。(中略) こういう詐欺師に引っかかって、こういう状態なんだと。ついては弁護士のところ相談に行きたいっていうことで。ヤミ金にも10件つながってるっていうことで(d)

## D. 考察

1. 病的ギャンブルの家族についての従来の知見

研究1の文献検討により、病的ギャンブルは配偶者や子どもや家族の関係性に大きなダメージを与えていること、および不適切な養育環境のダメージを受けた子どもが病的ギャンブラーになることが示された。つまり、家族関係の問題と、病的ギャンブルの発生には相互に影響があり、これにさらにうつや人下記障害等の合併症や貧困や暴力などの問題が絡み合っているといえる。そうしたことの典型的なパターンが病的ギャンブルの世代間連鎖ということになる。こうした状況を鑑みると、病的ギャンブルの対策において家族に対する支援が重要であるといえた。しかし、こうした家族への支援の研究は欧米においてもまだ十分でなく、先駆的な心理教育が試みられて

いる段階であることも明らかになった。今後こうした先駆的な研究をもとにした家族支援プログラムの開発や有効性の検証が必要であるといえた。

研究2では、病的ギャンブラーの方の語りをもとにした質的分析ではその疾病の発展や回復につながる過程において7つの要素が見いだされた。これをもとに以下に、病的ギャンブラーの認識の特徴についてギャンブリングと金銭的側面から考察する。また、家族への関わりについても検討したい。

## 2. 病的ギャンブラーの特徴

ギャンブリングを始めてから回復していくまでを、回復者とその家族6組に対して調査した結果である。病的ギャンブラーがギャンブリングを開始してから治療や相互援助(自助)グループに繋がるまでには、ギャンブリングすることで得る、お金をやりくりしながらギャンブリングを楽しむ、ギャンブリングに魅了され、仕事とする、ギャンブリングの動機づけが強化される、コントロールできる、治療、回復支援が可能という認識がなく、借金・尻拭いを繰り返す、追い込まれ、治療や施設に結びつくの、7つの要素を含み、それらが関連し合って病的ギャンブリングへと進行していくことが見出された。Argoら(2004)は先行研究の概観により、ギャンブリングの過程には4つの段階があり、勝利の段階、失う段階、自暴自棄の段階、降参あるいは絶望的な段階に分けられることを示している。本研究では病的ギャンブリングが進行していく中で、当事者の認識の変化を詳細に捉えることができた。さらに、この過程での家族との関連を見出すことができた。

対象者は幼少期よりギャンブリングに親和性があり、高校卒業後より急激にギャンブリングとの関係が密接になっていった。青年期は好奇心から酒、タバコを口にすることから、急性アルコール中毒や若い女性の喫煙率の増加が

問題となっている(岡部、2009)。これに衝動的傾向も加わってギャンブリングの優先順位が上がったものと考えられる。

ギャンブリングと密接な関係にある金銭面についてみると、比較的容易に消費者金融からの借入れをはじめ。簡単にお金を手に入れることを知ると、消費者金融を自分の貯金、あるいは隠し口座という感覚を持ち、ギャンブリングをするための財源として使用していく。この、いつでも使用できる「貯金」や「隠し口座」を使い続けるために、「利子のみを返済」という方策を取る。借金が発覚するまで家族にはこの事実を伝えることはなく、家族は数百万円という額に膨れ上がって初めて事実を知ることとなっていた。柳沢ら(2011)は、一大学の学生で、週1回以上ギャンブリングに接する常習ギャンブラーのうち、6人(2.8%)が強迫的ギャンブラーの可能性が高いと判定される得点であったこと、借金への抵抗が全くない・あまりない者が38人(17.2%)いたことを報告している。この中には本研究の対象者と同様の背景を持つ者や、将来病的ギャンブラーへと進行していく危険性のある者が潜んでいる可能性がある。問題が深刻化していくことを防止するためには、高校生や大学生といった青年期にある者に対して正確な知識の提供が必要であろう。

## 3. 家族の関わりについての検討

病的ギャンブラーを取り巻く家族には、主に親・兄弟姉妹と、妻・子供がいる。本研究において、病的ギャンブリングが進行していくプロセスの5段階で初めて借金の事実を知ることが示されたが、何れもギャンブリングやそれに伴う借気に気付かず、借金の事実が発覚した際には借金を返済する役割を担っていた。また、借金が発覚した際に、家族は借金の原因を明らかにしない、借金とギャンブリングが結びつかない、あるいはギャンブル依存症(病的ギャンブリング)という問題があること自体知らなかったことで、借金という事実のみに意識が集中

していた。病的ギャンブラーは借金の事実を家族に隠し、また、物質乱用の様に精神症状が出現しにくく、問題のあるギャンブリングのサインについて気付きにくい。そのため、家族にとっては突然深刻な経済問題を追うという状況に追い込まれる (McComb, J.L., Lee, B.K., Sprenkle, D.H., 2009)。このような状況により、家族自身も冷静さを持ち続けることが困難となり、借金への対処に追われることとなる。一方、病的ギャンブラーはこれまで自己を追い込み続けてきた借金から解放されることで気楽にギャンブリングに臨む事ができるようになり、新たな借金をつくるというサイクルが形成される。このことを考慮すると、病的ギャンブラーの家族にとどまらず、一般の家族に対しても病的ギャンブリングという問題があることを周知すること、そして借金あるいはギャンブリングの問題が発覚した際の対応方法について情報提供をしていくことが必要である。これにより、家族にとってこうした問題の認識がより早い段階にできることが期待され、ダメージが大きくなる前に適切な対応ができる可能性があるといえる。

また、先にも述べたが、幼少期よりギャンブリングに親和性があることでギャンブリングへの興味・関心を高める一要因となっている。好奇心の高まる青年期以降にギャンブリングへの親密性を高めることを防ぐためには、不用意にギャンブリングへの興味・関心を高めないような環境づくりも必要であろう。

## E . 結論

本研究では、病的ギャンブリングの進行や治療と家族がどのように関係しているか、そしてそうした家族をどのように援助するかを明らかにすることを目的に、研究1：従来文献の検討、研究2：病的ギャンブラー当事者と家族の語りの質的分析からみた家族への支援の2つの研究を行った。

従来の文献の検討により、病的ギャンブリ

ングは配偶者や子どもや家族の関係性に大きなダメージを与えていること、および不適切な養育環境のダメージを受けた子どもが病的ギャンブラーになることが示された。つまり、家族関係の問題と、病的ギャンブリングの発生には相互に影響があり、これにさらにうつ状態やパーソナリティ障害等の併存障害や貧困や暴力などの問題が絡み合っており、病的ギャンブリングの支援においては家族への対応が重要であることが示された。こうした援助ニーズに対して、家族に対する心理教育などが始められているが、欧米も含めこうした家族支援やその研究は未だ少ないことが指摘されている。

病的ギャンブラー当事者と家族の語りの質的分析により、病的ギャンブラーがギャンブリングを開始してから治療や相互援助(自助)グループに繋がるまでには7つの段階があり、その中で家族と関係する段階は(1)お金をやりくりしながらギャンブリングを楽しむ段階、(2)ギャンブリングに魅了され、仕事とする段階(3)ギャンブリングの動機づけが強化される段階、(4)コントロールできると考える段階、(5)治療、回復支援が可能という認識がなく、借金・尻拭いを繰り返す段階、(6)追い込まれ、治療や施設に結びつく段階という段階あることがわかった。病的ギャンブリングに進行していく段階の早い時期にはギャンブリングやそれに伴う借金という問題を家族に打ち明けることはなく、事実は隠されている。そして、第5段階に至ってはじめてギャンブリングによる借金があることを明確に認識し、第6段階でそれが治療、回復支援が可能な問題であることを理解する。家族にとってこうした認識がより早めに行えることで、ダメージが大きくなる前に適切な対応ができる可能性があるといえる。今後、病的ギャンブルが生じてくる段階に応じて、家族が適切な対応が取れるような援助を行えるようなサポートの手法を開発していくことが重要であるといえる。

## F . 研究発表

### 1 . 論文発表

- ・新井清美, 森田展彰, 葦澤博一 (2013) . プレアルコホリックの認識における変化のプロセス アルコール依存症患者とその家族の語りからの分析、日本アルコール薬物医学学会雑誌, 48 (3), 198-215.
- ・Arai.K., Oka.M., Motegi.E.(2014). Awareness of Pre-Alcoholic Status and Changes in Such Awareness Analysis of Narratives by Male Japanese Patients and Their Families, Journal of Addictions Nursing, 25 (1) .印刷中
- ・森田展彰: アルコール・薬物依存症と子育て支援・児童虐待防止 精神科治療学 第28巻 407-411 2013年(10)
- ・森田展彰, 田中裕子, 玉井紀子, 新井清美, 谷部陽子, 梅野充, 和田一郎: アディクションと子ども虐待の重複する事例への対応に関する研究 日本アルコール・薬物医学学会雑誌、48(4):137,2013.
- (pp.39-53). Virginia. American psychiatric publishing.
- ・Donald W. Black,D.W., Patrick O. Monahan ,P.O., Temkit,M.H., Shaw a ,M.:A family study of pathological gambling, Psychiatry Research 141 (2006) 295- 303.
- ・Hodgins, D. C., Shead, N. W., & Makarchuk, K. (2006). Distress among concerned significant others of pathological gamblers. Journal of Nervous and Mental Disease, 195, 1-7.
- ・樋口進, 久富暢子 (2000) 特集・職場のメンタルヘルス アルコール関連問題の診断・治療と早期介入、予防医学、42、33-38.
- ・Lesieur, H. R., & Blume, S. B. (1991). When Lady Luck loses: Women and compulsive gambling. In N. VanDenBerg (Ed.), Feminist perspectives on addictions (pp. 181-197). New York: Springer.
- ・Lobsinger, C., & Beckett, L. (1996). Odds to break even: A practical approach to gambling awareness.Sydney: Relationships Australia.

### 2 . 学会発表

- ・森田展彰, 田中裕子, 玉井紀子, 新井清美, 谷部陽子, 梅野充, 和田一郎: アディクションと子ども虐待の重複する事例への対応に関する研究 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会 平成25年10月5日岡山コンベンションセンターにて 137 2013年
- ・Makarchuk, K., Hodgins, D. C., & Peden, N. (2002). Development of a brief intervention for concerned significant others of problem gamblers. Addictive Disorders, 1, 126-134.
- ・McComb, J. L., Lee, B. K., Sprengle, D. H. (2009). Conceptualizing and treating problem gambling as a family issue. Journal of marital and family therapy, 35(4),415-431.

## G . 文献

- ・新井清美・森田展彰・葦澤博一 (2013) プレアルコホリックの認識における変化のプロセス アルコール依存症患者とその家族の語りからの分析、日本アルコール薬物医学学会雑誌、48 (3) 198-215.
- ・Argo, T.R., Black, D. W. (2004). Clinical characteristics. Grant, J. E., & Potenza, M. N (Eds.) *Pathological gambling* (pp.39-53). Virginia. American psychiatric publishing.
- ・森山成彬 (2009) 特集 精神経済学 社会における意思決定の神経基盤と精神医学 ヒト社会のギャンブル行動、臨床精神医学、(38)1、61-66.
- ・西川京子 (2012) 特集/家族支援を考える 精神保健福祉士に求められる家族支援 実践報告 依存症の家族支援、精神保健福祉士、

43(1)、22-24.

- ・岡部聡子(2009)成人の発達段階、大西和子、岡部聡子(編)成人看護学概論、東京、ヌーベルヒロカワ。
- ・尾崎米厚・松下幸生・白坂知信・廣尚典・樋口進(2005)我が国の成人飲酒行動およびアルコール症に関する全国調査、日本アルコール・薬物医学会雑誌、40(5)、455-470。
- ・Petry, N. M. (2005). Pathological gambling. Etiology, comorbidity, and treatment. Washington, DC: American Psychological Association.
- ・Petry, N.M. & Steinberg, K. L. (2005). Childhood maltreatment in men and women pathological gamblers. Psychology of Addictive Behaviors, 19, 226-229.
- ・Potenza, M. N., Steinberg, M. A., McLaughlin, S. D., Wu, R., Rounsaville, B. J., & O'Malley, S. S. (2001). Gender-related differences in the characteristics of problem gamblers using a gambling helpline. American Journal of Psychiatry, 158, 1500-1505.
- ・Specker, S. M., Carlson, G. A., Edmonson, K. M., Johnson, P. E., & Marcotte, M. (1996). Psychopathology in pathological gamblers seeking treatment. Journal of Gambling Studies, 12, 67-81.
- ・洲脇寛(2005)嗜癮精神医学の展開、新興医学出版社。
- ・Taber, J. I., McCormick, R. A., & Ramirez, L. F. (1987). The prevalence and impact of major life stressors among pathological gamblers. International Journal of Addiction, 22, 71-79.
- ・柳沢直恵・朝倉真理・大家ゆず子他(2011)一大学におけるギャンブリングに関する実態調査、信州公衆衛生雑誌、6、64-65。

。(債務問題支援機関における病的ギャンブ

リング問題に関する研究)

#### A. 研究目的

ギャンブリングの問題が深刻化すると、借金の問題が生じることが一般的に知られている。しかしながら、国内の債務問題の支援機関において、病的ギャンブリングの頻度に関する調査は行われていない。今回われわれは、病的ギャンブリングの疫学調査の標準的なツールとして世界で最も広く使用されている South Oaks Gambling Screen (SOGS) の日本語短縮版を用いて、関東圏内の債務問題への支援を行っている関連機関、司法書士会に協力を依頼し、それらの機関におけるギャンブリングの問題の頻度について調査を開始した。

#### B. 研究方法

##### 1. 対象

調査対象者 100 名：関東圏内の債務問題への支援を行っている関連機関における債務問題相談者。

年齢：20 歳以上

##### 2. 研究方法

債務問題相談者に対し、日本語 SOGS 短縮版を用いて調査を行う。

< 質問票の内容 >

・ギャンブルの深追いの有無、・ギャンブルの問題の自覚の有無、・ギャンブルが原因による同居者との口論の有無、ギャンブルが原因による借金返済不能の有無、・ギャンブルが原因による借金(家計、サラ金・闇金、銀行・ローン会社)の有無に関する質問。

##### 3. 倫理面への配慮

本研究は、独立行政法人国立病院機構久里浜医療センターの倫理委員会の承認を得た上で実施した。

##### 1) 対象者に対する人権擁護上の配慮

対象者に対して、書面にて 調査の趣旨、方法、 データは調査目的のみに用いられ、個人情報 は外部に漏らされないこと、 協力は自由意志であり、調査票の提出後であっても、希望

があった場合、速やかに調査を中止することを説明した上で、調査協力の同意を得ることとした。

個人情報の保護の方法については、個人の特定に結びつく個人情報は資料から削除し資料には新たな符号をつけ、連結可能匿名化してデータ票を作成した。協力機関にて作成したデータ票は、USB メモリーに保存の上、書留で郵送することとした。対応表は、研究終了後処分する。

## 2) 対象者に対する不利益・危険性への配慮

調査を受けることでの対象者の不利益はないことについて説明を行った。調査に対する質問や意見、万が一何らかの不都合が生じた場合にすぐ連絡できるよう、調査者の連絡先を記した説明書を配布した。

## C. 研究結果

平成26年度も調査を継続し、平成26年度に債務問題とギャンブル問題の関連性についての研究結果を報告する。

。(病的ギャンブルの早期介入手法について)

### A. 研究目的

近年、嗜癖問題対応は、問題が深刻化する早期の段階での介入が重要と考えられている。処方薬物への嗜癖や脱法ドラッグの使用等は、嗜癖者の問題性を示すのみでは、支援への結びつけは困難であることが推測され、動機づけ面接などの手法や薬物再乱用予防のためのプログラムには、様々な工夫がなされている。

ギャンブル問題もアルコールや薬物と同様に‘自然回復(natural recovery)’という現象が認められ、のめり込みにとまなう生活上の問題が顕在化した後に、のめり込みが消失し得ることを理解しておく必要がある。のめり込みが消失している段階での無理な介入は、嗜癖者本人の理解を得られ難く、援助者や治療者との距離を広げてしまうリスクがある。

ギャンブル問題の問題は、プロセスにのめり込む問題である。国内では遊戯も含め、数多くのギャンブルが合法化されている。一般的にはギャンブルと認識されにくい領域も含まれているため、研究班では研究、支援の対象を特定のギャンブルに限定せずに、議論を続けていく立場をとっている。「何をどこまでギャンブルとするか」という議論に固執し、自らの問題を認めることができない病的ギャンブラーもいることが推測される。

ギャンブル問題の問題は、世界保健機構やアメリカの精神医学会において、医学的診断基準が定められているが、ギャンブル問題を持っている当事者にとって、これらの診断基準を満たしているという状況から「ギャンブルを今後も止め続けなければならない」との自己決意に至るまでには、何段階かの経過が必要となることも考えられる。

これらを考慮すると、病的ギャンブル問題への対応の中で、治療や回復支援に結びつくまでの初期介入は重要なポイントであり、病的ギャンブラーが孤立を深めてしまわないための援助が求められる。今回われわれはギャンブル問題を持つ本人が、「ギャンブルを止めなければならない」という決意に至っていない段階においても、介入が可能な手法のひとつについて提示した(資料1)。

### B. 考察

この手法を用いることで、ギャンブル問題を持つ本人が、過度な抵抗感を持たずに自らのギャンブル問題について考えを深めることが期待できるものと推測された。治療や回復支援機関に結びつくことが困難な状態でも、ギャンブル問題を持つ当事者が、様々な立場の援助者との関わりを保ち続けることは、ギャンブルにより引き起こされる深刻な問題の弊害を軽減できる可能性があると考えられた。

